靖國神社絵馬

会報 特攻

平成30年2月

第１１９号

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
編集人　金子敬志
発行人　石井光政
印刷所　島根印刷株式会社

目次

平成30年初詣・・・

平成30年初詣

評議員　及川　昌彦

平成30年1月7日（日）、恒例となった特攻隊戦没者慰霊顕彰会初詣は晴天に恵まれ、世田谷区下馬の駒繋神社での新年初祈願から執り行われました。澤田浩治宮司により厳かな神事の中、岩﨑副理事長が代表して玉串奉奠しました。終了後、徒歩にて世田谷山観音寺に移動して観音堂で太田兼照和尚（顕彰会評議員）による読経、引き続き太田賢照大和尚による法話が行われました。

直会は藤田理事長による挨拶、岩﨑副理事長による献杯、衣笠専務理事による今年度顕彰会の二大行事（裏千家千玄室大宗匠献茶式・江田島旧海軍兵学校研修）の説明があり新評議員となった福江広明前航空総隊司令官（防大25期）と宮本雅史産経新聞本社編集委員が紹介されました。

ケータリングで用意された美肴と美酒を堪能し顕彰会事務局が調達した希少な景品の抽選会で盛り上がりました。時を忘れての歓談が続く中、名残を惜しんで散会となりました。

御神酒拝領

駒繋神社本殿

観音堂前での記念撮影

観音堂内における読経

第47回原町飛行場関係戦没者慰霊祭に参列して

専務理事　衣笠　陽雄
評議員　秋山　政隆

平成29年10月9日、福島県南相馬市の陣ケ崎公園墓地慰霊碑前で実施された「第47回原町飛行場関係戦没者慰霊祭」に顕彰会を代表して衣笠専務理事と秋山評議員が参列したので報告する。

1　慰霊祭の状況

平成29年10月9日福島県南相馬市原町区陣ヶ崎公園墓地内「原町飛行場慰霊碑」前にて「原町飛行場関係戦没者三三四柱慰霊祭」併せて、昭和54年以来続けられ、第39回を迎えた大東亜戦争に郷土部隊として参戦し、戦没された四六五柱の英霊を祀る「大東亜戦争原町関係戦没者慰霊祭」が「第47回原町飛行場関係戦没者三三四柱並びに第39回大東亜戦争原町関係戦没者四六五柱慰霊祭」として、原町飛行場関係戦没者慰霊顕彰会主催で催行された。参列者はおよそ90人、内、30名程がご遺族とその関係者で、参加者名簿に依れば、東京など関東圏、遠くは四国などからの参加者もあった。

常磐道浪江インターから車でおよそ三十分、かつて搭乗員達が特攻隊員として果敢に任務を果たすべく日夜訓練に勤しんでいた広大な場所がここ原町飛行場跡であった。これを一八〇度見渡す高台に「原町飛行場慰霊碑」が鎮座する見晴台があり、ここに例年会場が設けられ、慰霊祭が執り行われてきている。衣笠専務理事に依れば、前回訪問時はその中腹が林になっていたが、今回はそのほとんどが伐採され、風景も一変している様だった。

当日は爽やかな快晴、風もなく穏やかな誠に秋らしい天気であった。開式となり、斎主、森幸彦氏による神事が厳かに執り行われた。冒頭同顕彰会事務局長八牧将彦氏が挨拶に立った。東日本大震災以降、以前と比べ小規模の開催となり、開始以来関係各位の支援により催行されてきた慰霊祭であったが、今年度をもって最後の催行となることの報告があった。自身戦争を知らぬ世代であるが、先々代の事務局長でこの慰霊祭を多くの関係者と共に当初より中心となって運営をしてこられた伯父の八牧通泰氏より伝え聞いたことは、後世の若者に伝えていく事が大切であると述べた。南相馬市長、南相馬市市議会議長に続き、当顕彰会衣笠陽雄専務理事より追悼のことばが述べられた。これまで五〇年にわたり八牧家を中心とした地元関係各位のご尽力に対し感謝とお礼を申し述べると共に長年の慰霊顕彰を途絶えさせるに際し、御霊等を悲しませることとなり残念の極みとの意を表した。主な内容については後段の通りである。

続いて、地元コーラスグループ、原町メンネル・コールの皆さんによる、「海ゆかば」、「同期の桜」、「暁に祈る」、「原町特攻隊の歌」、「戦友別盃の歌」、「君らここに甦れ」の鎮魂歌六曲が献歌され、玉串奉奠、神事に続き、最後の当地における慰霊祭は一旦幕を閉じる形で終了、その後、参列者全員による記念撮影となった。

（秋山　政隆記）

2　参加所見

（1）慰霊碑等の管理と慰霊祭の継続について

原発近くの原町慰霊祭には三年前に参列した。その時は大震災からかなりの年月が経っていたにも係わらず原発周辺はゴーストタウンであった。しかし慰霊祭には仮設住宅から普段着で参列！された方がおられたのを知り感動を覚えたのであった。その後原町については常に脳裏から離れなかった。　それは我が顕彰会の山本元会長が、原町飛行場で訓練・出撃・散華された兄上の山本卓美を想われ

毎年慰霊祭に参列されておられたことに私が影響された事もあるが、原町飛行場関係戦没者慰霊顕彰会（以下原町顕彰会）の初代八牧通泰事務局長とご家族の特攻戦没者に対する強烈なる慰霊顕彰の心、各戦友間の強固な団結力、地元の人々の温かな、人間性溢れる風土等から他の急造部隊には見られない特色があり、現在残された遺書等から見ても官民一体となった理想の訓練環境であったと確信していたからである。

慰霊祭に於いて、原町顕彰会三代目の八牧将彦事務局長は、特攻隊員の慰霊顕彰の必要性を述べつつも「・・・　本慰霊祭はご遺族や関係者の高齢化に伴い今年度を以て最後とさせて頂きます・・」と述べられた。私は追悼の辞を求められた時、ご英霊に申し上げる内容ではないが以下の要旨の内容を申し上げた。「・・

御霊等が日本の勝利と未来を信じて『十死零生』という究極の任務を敢然と遂行された崇高な精神の伝承を、八牧家を中心に過去五十年近くに亘り継続された事は、全国の同様な慰霊祭と比較しましても聊かも遜色なく誠に意義深く特筆に値するものであり、この間の八牧家以下の関係者の御尽力に対し心から感謝と御礼を申し上げる次第です。今回をもって御遺族や関係の高齢化に伴い本慰霊祭を終わらせるとの御連絡を頂いておりますが、祭られている御霊等も悲しまれるでありましょうし、何と申しましても八牧家を始め地元の皆様の長年に亘る慰霊顕彰活動が途絶える事は誠に残念の極みと言わざるを得ません。今後の事は種々方策をお考えの事と思いますが、私共特攻隊慰霊顕彰会は、この碑と慰霊祭を永遠に管理・　存続し、御霊等の慰霊顕彰を継続して頂ける様切に願うものであり、そのための御支援を惜しまないものであります。・・・」　八牧家一族が中心になっても存続出来ない状況になったのは理解出来る。個人的に過去47回も継続して来られた事自体驚異的であるが、永続となると負担は想像以上になるだろう。また碑等の管理も個人で継続するには規模が大きすぎると思われるからである。

（２）今後の特攻隊・特攻隊員の慰霊・顕彰について

18年程前、原町慰霊祭が隆盛を誇っていた時、当顕彰会の田中理事が、八牧通泰事務局長に今後の問題として「慰霊祭は将来どうなるのか」という質問をされたときの記録が残っている。　この時事務局長は、「現在遠隔地から慰霊祭に見えられる飛行場関係のご遺族は10～20名程度であり最早兄弟から甥姪に移りつつある。それでも戦死者に対し色々聞かされているご遺族は後継者の名を届けてくれる。この意味で昨年「航空兵の記録」を刊行し、後継者にもご英霊の戦死状況や当時の情勢など知ってもらおうと努力した積りである。また昭和54年地元戦没者の御英霊を合祀し、銘盤を設置したことにより、そのご遺族が多数出席され、次代への継承に望みを託している。しかし問題なのは、これを取り仕切る事務局が末永く存続するかどうかということにある」と答えておられる。八牧初代事務局長は、当時既に将来の慰霊祭の問題点を的確に把握されておられたのである。現在の全国の慰霊祭で、個人的、私的組織で実施しているところは共通的な問題点を抱えていると思われる。一方慰霊祭の個人的運営から公的組織に移管したところや当初から市や町等が主催しているところは現在も営々と慰霊祭を継続している。例えば、知覧、万世、川棚、鹿屋、串良、大津島、都城、指宿等々当初は戦友達が始めた慰霊祭を市町村等の公的組織に委ねた結果、現在も整斉と継続実施されている。無論秋田、鎌倉神雷部隊等私的な組織で努力され実施されて居る所もあるが、継続性、顕彰の効率性等の面

からは公的機関には及ばないと思うし、今後関係者の更なる高齢化を考えるとき今、後継者を養成しなければ慰霊祭はいずれ廃れてしまうだろう。一方公的機関は、反対団体は当然存在し、そのため実施要領に制約があるものの、不特定多数の住民を取り込め、対象の拡大を期待出来、何と言っても仕事で慰霊祭のお膳立てを将来にわたり末永く実施して頂けるという最大のメリットがあるのである。我々顕彰会の最も重視すべきことは、特攻隊・特攻隊員の顕彰すなわち「特攻隊員の精神の伝承」である。精神という無形な抽象的な事象を子孫に伝える事は言うは易いが極めて困難である。我々会員は先ず自ら特攻隊の行動を理解し、特攻隊員の心情を理解しつつ、少しずつ多くの国民に伝えていくことが必要である。その問い掛けを受け入れやすくしてもらう意味からも公的機関による慰霊祭や行事等の施策が更に広がることを期待したいと思う。

（衣笠　陽雄記）

平成29年度、樹木が伐採され原町飛行場跡が一望となった慰霊碑台上

平成26年度の慰霊祭。前面は全く見えない

平成29年度「長野県特攻勇士之像慰霊祭」に参列して

理事　臼田　智子

平成29年10月10日（火）午後2時より、長野県護国神社において長野県特攻勇士之像慰霊祭が斎行された。

本慰霊祭は長野県特攻勇士之像が建立、奉納された月日に合わせて10月10日に斎行された。

長野県特攻勇士之像

当日は長野県護国神社宮司奥谷一文様のもとに長野県隊友会会長様、信州偕行会会長松本市崇敬者奉賛会顧問、会長、長野県遺族会会長、多くの方々が参列していました。松本市市議会議員の阿部功祐様はその日、衆議員議員の告知日と重なりましたが、慰霊祭に参列してくださいました。祭典出席者は当顕彰会私含めて22名参列しました。

秋晴れの中と申し上げたいのですが、大変暑い日でしたが、時おり風が吹きぬける中、式典は厳かに進行し、滞りなく終了した。その後会場を美須須会館中ホールへ移動し直会がありました。その席で私お隣りに元信州大学医学部長であられた先生にお会いしました。先生は95才と申しておりました。先生は一年早く生まれていたら戦争に行っていたかもしれないとお話ししてくださいました。先生は昭和45年8月9日に長崎にいました。原爆のお話し、その時のこと、その時代に体験された先生のお話は私にとって、大変貴重な時間をいただきました。

長野県の護国神社は長野県の中央の地、松本市に鎮座し信濃の国の守護神として尊ばれています。私も御守りを買って参りました。平和と幸福をもたらす神社に参列出来ましたこと、今日の慰霊祭が後々まで続きますように祈念致します。

長野県護国神社本殿

長野県護国神社正面鳥居

平成29年度明野忠魂塔慰霊祭

評議員　倉形　桃代

平成29年10月21日、陸上自衛隊航空学校が所在する明野駐屯地（三重県伊勢市）に於いて「平成29年度明野駐屯地追悼式」「第56回明野忠魂塔慰霊祭」が催行された。２年前に参列した時は、まさに「コバルトブルーの空」の下、献花に囲まれた真っ白な忠霊塔のコントラストが哀しくも美しかったが、今年は台風21号の接近に伴う降雨の為、体育館「明桜館」内に設置された祭壇前で行われた。

青空のもとの忠霊塔

今年の参列者は、ご遺族３名・来賓16名・明野忠魂塔顕彰会会員67名・田尻祐介陸将補（航空学校長兼明野駐屯地司令）始め明野駐屯地の隊員47名、計１３３名であった。若い世代の参列者も散見された。慰霊祭当日、ヘリコプターの体験搭乗が予定されていたが、雨の為中止となった。私は、嘗て英霊が飛んでいた空を飛んでみたいと思っていたので、とても残念だった。

「明桜館」内に設けられた祭壇

式典は、開式の辞・国歌斉唱・拝礼・儀仗の後、田尻航空学校長・明野忠魂塔顕彰会副会長梼原久生氏が追悼の辞を述べられ、その後参列者全員による献花・追悼電報披露・陸上自衛隊中部方面音楽隊による追悼演奏が行われた。曲目は「分列行進曲」「加藤隼戦闘隊」「時代」その力強く美しい音色は忠魂塔に祀られた千五百余柱の旧陸軍明野飛行学校関係の戦没者と16柱の陸上自衛隊航空学校関係の殉職者、その御霊よ安かれと願う参列者の心にも深く沁みわたった。演奏後、静まり返った式場の外を降りしきる雨が屋根を打つ音が万雷の拍手のように聞こえたのが印象的だった。その後、再び儀仗隊が入場して「捧げ銃」の後、弔銃・拝礼・閉式の辞を以て式典は終了した。「後を頼むぞ」と託された英霊も、後輩たる自衛隊員の方々の支援を嬉しく頼もしく思っていらっしゃるに違いない。

陸上自衛隊明野航空学校儀仗隊

○　八紘隊・善家善四郎大尉のこと

もう何年前になるだろうか。靖國神社で行われた我が顕彰会主催の慰霊祭の直会の時、同じテーブルで隣の席に座られた善家善四郎大尉（陸軍特別攻撃隊八紘隊・昭和19年11月27日フィリピンにて戦死／幹候9期・京都府出身）の妹様でいらっしゃる田辺さだ子さんと親しくお話をさせて頂いた。その時にうかがった善家大尉との明野での最後の面会の話がずっと心に残り、以来お目にかかる機会や手紙のやりとりの中で、兄上様との思い出や戦時中の体験をうかがい、ご遺族のお気持ちの強さを実感して来た。

最後の面会の思い出は、平成27年に刊行された「英霊に贈る手紙―今こそ届けたい、家族の想い―（終戦七十年靖國神社遊就館特別企画　靖國神社編）という本に「長い敬礼」というタイトルで収められている。さだ子さんがお母様と京都から明野に面会に行かれた時のお気持ちを、手紙と言う形で綴られ、善家大尉のご遺影も掲載されている。

さだ子さんは、当時京都府立桃山高等女学校（現・京都府立桃山高等学校）の3年生で、学徒動員で宇治市大久保（現・陸上自衛隊大久保駐屯地）にあった飛行機の工場で輸送機のエンジン格納部を作るナセル班に所属していた。8月15日の玉音放送も、この工場のラジオで聞いたそうだ。

○　最後の面会

さだ子さんとお母様は、当時住んでいた京都から明野飛行学校にいる善家少尉（戦死後大尉になられたが、ここではあえて当時の階級で記す）に面会に行った。隊舎の一室でお弁当を広げて食べた事や、八紘隊隊長の田中秀志中尉（陸士56期）始め同隊の方々にも会う事ができて、とても良いひと時を過ごした。いよいよ別れの時が訪れた。さだ子さんとお母様は営門までの道をトボトボ歩いた。見送りの善家少尉は腕組みをして、俯き加減で歩いている。別れ際に敬礼をした。お辞儀をしたお母様が、3度位お辞儀をし直した程、長い長い敬礼だった。特攻隊員になった事は言わなかったが、思えば永久の決別の想いを籠めた敬礼だったのではないか。

以上が、さだ子さんのお話を纏めたものである。

○　八紘隊のこと

昭和19年11月27日、田中隊長率いる陸軍特別攻撃隊八紘隊はネグロス島のファブリカ飛行場から10機の一式戦を以て、レイテ湾の敵艦船に攻撃を敢行、29日、大本営は「轟撃沈　戦艦一隻・大型巡洋艦三隻・大型輸送船四隻、大破炎上　戦艦又は大型巡洋艦一隻・大型輸送船一隻」の大戦果を挙げたと発表、新聞でも大々的に報道された。

八紘隊員が出撃の地に到着してから出撃・散華までの様子は、当時ファブリカ飛行場で直掩任務に就いていた飛行第54戦隊所属の水野芳衛中尉（陸士56期）の手記「八紘隊覚書」（特操一期生史掲載）に詳細に記されている。現場で直に接していた水野中尉は「特攻」という言葉がまだなかった時期、爆弾を搭載した愛機諸共体当たりする八紘隊員の方々が、出撃の日まで見せた立派な言動、その境地に至るまでの心の葛藤は如何ばかりだったかと深い感銘を受けた事等も、日々の出来事と併せて記録されている、たいへん貴重な資料である。

明野駐屯地は、東京から新幹線と特急を利用しても、約4時間余かかる場所にある。さだ子さんは80代というご高齢であり、カートを押しながら歩いていらっしゃる。息子さんご夫婦が付き添われ、駅まで駐屯地のバスが迎えに来て下さるとはいえ、慰霊祭に参列されたい一心で、遠路旅して来られるのだ。特に今回は雨天でもあり心配していたが、ご無事に駐

屯地で再会できた時は本当に安堵した。さだ子さんにとって、明野の地は兄上様との思い出が詰まった特別な場所なのだ。

明野航空記念舘入口

駐屯地には「明野航空記念舘」（旧陸軍将校集会所）という展示館があり、その顕彰室には陸軍飛行学校関係の史料や、ご遺族から寄贈されたご遺品等が展示されている。さだ子さんは毎年、慰霊祭への参列と、そこに展示されている八紘隊の写真に写っている兄上様に「会う」ことを励みとされているようだ。

前列左が善家善四郎大尉

今回の慰霊祭に参列されたご遺族は、田辺さだ子さんと息子さんご夫婦の３名のみだった。慰霊祭の帰り道、お三方と明野駅から松坂駅までご一緒させて頂いた。電車を待つ駅のベンチで、色々なお話を伺った。

これまで伺ったお話は沢山あるが、特に心に残ったのは「飛行機に乗ると、いつも泣いてしまうんです。兄は飛行機の車輪が離れた時、神様になったんだなあと思い、兄の気持ちを思うと泣いてしまうんですよ」というお話である。

前回、あるご遺族が、形見の軍刀とご遺影が納められている顕彰室の展示ケースの前で「兄さん、会いに来ましたよ」と涙ぐんでいらっしゃったお姿を拝見した。

さだ子さんのお話も併せて、何十年たってもご遺族の悲しみは変わらないのだと、強く実感したのである。

ご遺族や戦友の方々が、来年もまたお元気で慰霊祭に参列され、顕彰室のお身内や戦友と再会できますようにと、心から願っている。当事者の方々から体験をうかがう事ができた私達の世代は、それをしっかりと記録して後世に伝えていく義務があると思うので、機会ある毎に実行していこうと思っている。

潜水艦殉国者慰霊祭に参加して

評議員　及川　昌彦

平成29年10月23日（月）東郷神社・潜水艦殉国者碑にて潜水艦殉国者慰霊祭が執り行われました。伊呂波会勝目事務局長による司会で神事が実施されました。

本慰霊祭は先の大戦において散華された英霊、任務遂行中に殉職された潜水艦乗組員や技術者等潜水艦関係者の鎮魂を目的として昭和33年から毎年挙行されております。

10月23日というのは潜水艦部隊が初めて国民の前に披露された日露戦争凱旋観艦式が実施された日です。

慰霊祭は帝国海軍潜水艦乗りの方々、ご遺族、潜水艦司令官ほか靖國神社の徳川宮司、福岡東郷神社の川野宮司、田内浩東郷会理事長が参列する中、西村義明潜水艦殉国者慰霊顕彰会会長による祭文奏上、玉串拝礼等粛々と行事は行われ、散華された英霊に深く思いを致すひと時でした。終わりに一同潜水艦殉国者慰霊碑にお参りして慰霊祭は滞りなく終了しました。伊１５６乗組だった引地正明元中尉（海兵73期）によれば回天輸送任務に従事していたとのことでした。國田公義元少尉（海兵74期）は回天搭乗員として光基地で訓練を受け伊58の出撃を見送り終戦を迎えました。こういった方々から貴重な体験談を拝聴出来たことが何よりの収穫でした。

（祭文奏上）

慰霊の言葉

本日、ここに多数のご来賓、ご遺族のご臨席の下、厳粛かつ盛大に潜水艦殉国者慰霊祭を挙行し、我が国の発展と安寧を願い散華（さんげ）された潜水艦勇士の御霊に慰霊の誠をささげることは、後世に生きる我々の当然の務めであり、誠に意義深いものがあります。

本日は、ここ東郷神社に設けられた潜水艦勇士に捧げる碑文の朗読をもって、幾多の英霊の御霊を讃える私の言葉に代えさせて頂きます。

碑文「潜水艦勇士に捧ぐ」

太平洋戦争中、百二十余隻の潜水艦と共に戦没された一万余人の乗員諸君。特殊潜航艇及び回天決死隊諸君。また諸公試、演練に殉職された諸君。諸君の遺骨は海底深く沈んでこれを回収する途がない。

しかし、それは国難に赴いた諸君の忠誠が、そのままその戦場に在ることを意味する。民族の急を救うべく戦った犠牲の精神はとこしえに其処（そこ）に活きている。

残された潜水艦関係の吾等は、個人と法人と併せて幾千、常に諸君の英霊の坐する海底を見つめている。

願わくは日本国民の全部も、ありし日の諸君の勇姿と奮戦激闘の光景と、護国の屍（かばね）となった戦場とを緬想（めんそう）して、敬弔の誠を伸ぶると共に、祖国再興の心の糧とすることを祈願して已まない。

茲（ここ）に曽（かつ）ての戦友、潜水艦建造関係者外（ほか）有志一同相計り、小碑を東郷神社の霊域に建立して諸君不滅の忠魂に捧ぐ。

昭和三十三年五月二十五日

今まさに祖国危急の折、自衛隊諸子に英霊のご加護在らんことを祈念して。

平成二十九年十月二十三日

潜水艦殉国者慰霊顕彰会

会長　西村　義明

潜水艦殉国者碑

第42回神風特攻敷島隊五軍神・愛媛特攻戦没者慰霊追悼式典に参列して

理事　小倉　利之

楢本神社正面

1　慰霊祭の状況

平成29年10月25日10時30分から、すばらしい秋の日和が、どこまでも続く青い空のもと、敷島隊隊長・関行男の故郷である愛媛県西条市大町の楢本神社境内の関中佐の慰霊碑の前において、ご遺族、ご来賓、一般参列者等が、数百名の人が集まり、慰霊追悼式典が始まりました。式典が始まる前には、セスナ機3機が飛来し会場上空をローパスして華を添えた。

「開式のことば」の後、徳島県小松島から海上自衛隊第24航空隊の隊員の手により国旗・軍艦旗の掲揚が行われ、「国歌斉唱」「鎮魂の礼」として奉賛会の女性により、献茶と追悼文が朗読され一同黙祷を捧げ「儀仗の礼」海上自衛隊儀じょう隊が「捧げ銃」の敬礼の後弔銃を3斉射発射した。

海上自衛隊儀じょう隊

・「式辞」　奉賛会会長　村上俊行氏

当時二十歳の前後の若者たちが、国や家族のことを思い死んでいったことを知らない現代の若者たち、それを教育しない戦後の世相を痛烈に批判し、英霊に対するお詫びと将来の子供に対する教育を託す切なる願いを、述べた式辞であった。

・「追悼の言葉」西条市長（代理）越智典夫氏　西条市議会議長　伊藤孝司氏

・「献花」「追悼の歌」地元の婦人合唱団と大正琴追悼演奏と「関中佐功績顕彰歌」

・「同期の桜」「若鷲の歌」の合唱が行われた。

・「旧海軍儀仗」「追悼電報の披露」「海ゆかば」

・「謝辞」遺族代表の神雷部隊の曽我部少尉のご遺族が謝辞を述べられた。

・「国旗・軍艦旗降納」「閉式のことば」を以って慰霊祭は終了した。

2　参列しての所見

関行男海軍中佐（海軍大尉から戦死後、2階級特進）の慰霊碑は昭和50年に建立。昭和56年からは敷島隊隊員4柱（中野磐雄命、谷暢夫命、永峰肇命、大黒繁男命）も合祀され、現在93柱の御霊が祀られています。

敷島隊をはじめ多くの特攻隊員の方々による身を捨てての体当たり攻撃が、米軍の心胆を寒からしめ、最終的に国の独立を守り、国体を維持することができたことを思えば、ただただ感謝であります。

関行男　辞世

「教え子は　散れ山桜　かくの如くに」

（第42飛行学生へ）

10月25日は、敷島隊　関行男大尉を隊長に５名が神風特別攻撃隊の先陣として、敵機動部隊の空母群に突入し壮烈な戦死をされてから、74回目の命日であります。この記念すべき日に敷島隊員、これに続いて散華された愛媛県関係の多くの隊員の他、ご遺族様からご要望のあった特攻隊員に対し、式典が行われました。当日早めに式場を訪れ資料収集を行いました。奉賛会の方々が、皆力を合わせ準備に取り掛かっておられました。

奉賛会の皆様は、兵士の体験のない人の集まりで、関中佐の地域、母校を同じくする者の他、会の趣旨に賛同する者たちの集まりでした。

会長村上俊行氏とのお話しで、長年わたりお世話頂いておりました寺田幸男元会長が逝去され、本年から会長として、追悼式を行いますので宜しくとのあいさつがありました。しかし、奉賛会の人は、皆様張り切って仕事をしておられ、敬服致しました。

我々も感じておりますが、慰霊祭とか追悼式を推進し、後世に語り伝えることが平和への誓いと行動であります。このことについては、特攻隊戦没者慰霊顕彰会においても、作業を実施しつつも、常にこころしているところです。

敷島隊（零戦９機、攻撃５機、直掩４機）は、関行男大尉のもとに０７２５マラバカットを発進し、比島東海岸沿いにタクロバンに向かって索敵攻撃の途中、１０１０東方スコール中に戦艦４～５、巡洋艦、駆逐艦等30隻以上、Ｆ６Ｆ、25機、在空の部隊が北進しているのを認めた。次いで１０４０、タクロバンの85度約90マイルに空母４隻、巡洋艦、駆逐艦など群を発見。１０４５攻撃隊は空母めがけて突入した。

直掩機により確認した結果はまことに偉大であった。零戦２機が１隻の中型空母に命中、同空母は、沈没した。１機の命中を受けた別の中型は空母火災を起こし停止した。もう１機は、巡洋艦に突入しこれを撃沈させた。

特攻戦果の大本営発表

昭和19年10月29日〈日〉「神鷲の忠烈万世に燦（さん）たり」この大見出しで、関行男大尉の指揮する敷島隊の特攻出撃と、その戦果に関する大本営発表が新聞紙面に発表された。

上聞（じょうぶん）について

米内光正は天皇から「かくまでやらなければならぬということは、真に遺憾であるが、しかしよくやった。」

及川軍令部総長は、「まことによくやった。攻撃隊員に関しては真に愛惜にたえない。」

「愛惜」は、現地指揮官の口を通すと、「激励」となったようである。

この話も一因であったらしい、終戦まで特攻が続くことになる。

追悼式では、特に、関中佐「功績顕彰歌」が地元婦人コーラスグループにより、歌われており、感銘を受けましたので紹介いたします。

「関中佐功績顕彰歌」

１　武丈の花の精うけて　大和心の敷島隊　吹けよ神風花吹雪　散りて尊き軍神

２　必死必中敵艦に　ああ壮烈の体当たり　鬼神もさくる特攻の　先陣切りし関中佐

３　見送る基地に手をあげて　こたふ間もなく雲の上　生も死もなき心境に　取る零戦の舵かるし

４　スルアン近く敵の艦　忽ち覆ふ弾幕ニッコリ笑って振る翼　我につづけと急降下

５　五つの肉弾　轟然と　あげる火柱・水柱　いさおも高き忠烈は　いや輝かん萬世に

６　大君の為　神風は　翼つらねて今日も征く　中佐の霊や故郷の　我らに何を求むらん

大阪護国神社「第九回特攻勇士慰霊祭」に参列して

評議員　石井　千春

平成二十九年十月二十九日（日）大阪護国神社にて第九回「特攻勇士慰霊祭」が執り行われた。

昭和十五年創設の大阪護国神社には、大阪府出身ならびに縁故の英霊十五万五千六百余柱が祀られている。神饌は氷砂糖、水、煙草の三品である。一片の氷砂糖が最上の甘味、一杯の水さえ飲めず、一本の煙草も戦友と吸い回すような戦場の労苦を偲び英霊に感謝するためのものである。

皇室の御崇敬は厚く、昭和四十五年に昭和天皇・皇后両陛下、五十三年に今上天皇・皇后両陛下の御親拝を仰いだ。

早朝からの雨の中特攻勇士の像前にて慰霊祭は十一時に開式となった。参列者は約五十名であった。特攻勇士顕彰会理事、小野寺正芳氏（仙台陸軍幼年学校四十九期生）が、開式の辞を以下のように述べられた。

「・・・顧みますと本事業は、平成十七年大阪芸術大学の学生・教員を中心とするボランティア団体『日本人の心を伝える会』が、いざという時には、一命を擲って愛する国と国民を護ろうとする特攻の崇高な精神を、末永く伝承する事を願い、CD『ああ特攻』を制作販売し、その売上料で『特攻勇士の像』を全国の護国神社に奉納して行きたいという活動に端を発しています。

その趣旨に賛同し、これを引き継いだ現在の『公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会』が推進母体となり、具体的な販売計画や資金計画について全面的に支援する事を決定、更に大阪地区では十を超える協力団体により当『特攻勇士慰霊顕彰会』の役員を構成して頂いており現在に至っております。

先の大戦において、国難に立ち向かい熾烈な戦場に赴かれた多くの将兵の方々が時に利あらず、敗戦のやむなきに至りました。連合国側は、裁判の名を借りた不法な復讐劇により、戦犯の汚名を着せました。この裁判は連合国の最高司令官ダグラス・マッカーサーが指揮し、国際法によらず、いわゆる『マッカーサー条例』（極東国際軍事裁判所条例）により日本を侵略国と決めつけ、一九四六年から四十八年にかけて行われ、一九四八年末判決が下され、東条英機以下七名が処刑されました。

然し僅か二年半後、朝鮮戦争でトルーマンに解任されたマッカーサーは、一九五一年五月三日アメリカ上院軍事外交委員会で『日本は自衛の為に先の戦争に突入した』と証言しました。

マッカーサーの証言によって日本を裁いた『東京裁判史観』は完全に破綻したと言わねばなりません。一九五二年四月二十八日、サンフランシスコ講和条約発効に伴い。四回に亘る国会決議が行われ一七四名全ての名誉が回復され、戦犯なるものは無くなったわけです。

更にマッカーサーは占領期間中の一九四六年二月、総司令部に憲法作成を指示、同年十一月日本国憲法が公布されました。実は『占領憲法』であります。占領目的は、日本国が再び米国の脅威とならないことを確実にするため『九条二項』に『戦力の不保持と交戦権の放棄』をうたっています。この九条二項は欠陥事項であり、自国民を護るべき国民主権を放棄した『憲法違反』であります。

自分の国は自分で守るとの『自尊自立』の精神を取り戻すことが重要です。自衛隊を憲法に明確に位置づけ、名誉ある地位をあたえなければなりません。

今や我が国を取り巻く安全保障上の国際環境は、大変厳しいものがあります。なお一層、心を一つにしてこの国難を乗

り切るべき時が参りました。我々は此処に眠る英霊の慰霊顕彰を通じ、真実を後世に語り継ぐのが、我々日本人の責務であると思います・・・。」

国家斉唱、黙祷、修祓の儀、降神の儀、献饌、祝詞奏上、特攻勇士顕彰会会長中一皓氏による祭文奏上、祝電メッセージ披露、玉串奉奠、撤饌、昇神の儀、神官退場と式は進み、最後に、陸上自衛隊第三師団第三音楽隊による慰霊鎮魂の演奏があり、閉式の辞となった。演奏では「同期の桜」「予科練の歌」などの軍歌十曲の独唱と「大空」「君が代行進曲」の演奏の後、特攻勇士に哀悼をこめて「海ゆかば」を参列者が斉唱した。

独唱する音楽隊員

式典後の直会では、特攻勇士顕彰会の方々をはじめ慰霊祭にご尽力くださった皆様と交流でき有意義であった。

大阪護国神社本殿

大阪府下では最大の鳥居

埼玉県護国神社特攻勇士之像慰霊祭に参加して

評議員　及川　昌彦

平成29年10月31日（火）、さいたま市大宮区大宮公園内にある埼玉県護国神社「特攻勇士之像」前にて行われた、埼玉県特攻隊慰霊祭に参列いたしました。

当日の参列者は、御遺族・お仲間の方を含め17名。寒いながらも秋晴れの一日でした。

慰霊祭は、当顕彰会金子氏による司会により、国歌斉唱に始まり、黙祷・修払・献饌・祝詞と続き、祭文では岩成評議員が顕彰会を代表し奏上し、続いての玉串奉奠は、参列者全員が行い、撤饌・挨拶と続き滞りなく終了いたしました。その挨拶では、埼玉県特攻勇士之慰霊顕彰会関根則之会長より、「本日は世間的にはハロウインだそうだが、ハロウインに興じている若者の狂態は、英霊達にはどう写っているのだろうかと憂慮している」と言う内容に共感したのは私だけではなかったと思います。

会場を護国神社２階に移動しての直会では、関根会長による忘れてはいけない戦いについての講話から始まりました。

ユダヤ戦記に書かれている「マサダの砦の戦い」、スパルタ軍の兵士が戦った

「テルモピレーの戦い」そして「特攻」前記２つの戦い同様に、特攻についても後世に語り続けていかなければならない。20歳を迎えることなく亡くなった方々を始め、空で・海で亡くなった多くの方々に対し、単なる慰霊ではなく、その偉業を敬意を表し伝えていかなければならない。との想いのこもったお話でした。

続いて当顕彰会衣笠専務理事による献杯と続き、和気藹々とした懇談となりました。

この席上、関根会長より今後の埼玉県特攻勇士之像慰霊祭についての提案があり、奉賛会を発足し、次回からは奉賛会として活動をしていくと言う事になりました。尚、奉賛会会長には、顕彰会岩成評議員が、事務局長には、同じく秋山評議員が任命された事を記しておきます。

この慰霊祭は、毎年10月31日に行われます。皆様も是非ご参列下さい。

埼玉県特攻勇士之慰霊顕彰会関根則之会長ご挨拶

平成29年度回天烈士並びに回天搭載戦没潜水艦乗員追悼式に参加して

評議員　岩成　真一

平成29年11月12日（日）山口県周南市大津島において、澄み渡る大空の下、ご遺族の方60名、回天関係者12名の方々など２００名以上の参加者にて、追悼式が執り行われました。

大津島・馬島桟橋近くに九三式魚雷の製造工場跡があり、昭和一九年九月に、回天の搭乗員を育成する基地となりました。太平洋戦争の末期、“天を回し、戦局を逆転させる”という願いを込めて、人間魚雷「回天」は誕生しました。今は、変電所、点火試験場、外壁などが残る他は、大津島小学校・幼稚園となっています。大津島馬島桟橋までは、山陽新幹線徳山駅近くの徳山港から旅客船（直行）でしたら20分ほどです。

追悼式は、国歌斉唱、黙祷に始まり、原田茂回天顕彰会会長の式辞がありました。式辞の中で、「ＫＡＩＴＥＮ」の日本語版が11月８日に回天顕彰会から自費出版されたとのご報告がありました。昭和19年11月20日に菊水隊の仁科中尉（没後大尉）が撃沈された米海軍油槽艦「ミ

シシネワ」の生存者ジョン・メア氏のご子息マイケル・メア氏が日本側の協力を得て、執筆された著作です。また、11月11日（土）に行われた「第３回平和の島スピーチコンテスト～いのちのいのり～」の優秀作品の発表や献花協力をいただいた太華中学校の生徒さんについても触れられ、若い世代の皆様の参加を切望されました。

平和の島スピーチコンテスト

続いて、追悼の言葉として、安部晋三内閣総理大臣（代読）、木村健一郎周南市市長、海上自衛隊第１潜水隊群司令笹本敏成１等海佐、村岡嗣政山口県知事（代読）がありました。峯誠吟詠会の皆様による献吟の後に、海上自衛隊潜水艦が停泊する中、航空自衛隊第12飛行教育団（防府北基地）Ｔ―７練習機３機、海上自衛隊小月教育航空群Ｔ―５練習機３機による追悼飛行がありました。続いて、長谷川力雄様による尺八献奏に続き、献花が行われました。

平和の島スピーチコンテスト優秀者のスピーチは、「遺骨収集」と題して、住吉中学校２年　河島悠太さんが発表されました。高野山で行われるミャンマー戦没者の慰霊祭に、祖母と参加した体験から家族の思い、平和の尊さについて、素直に語っていただきました。

追悼電文の奉読、大徳山太鼓「回天」の奉納に引き続き、原田回天顕彰会長の挨拶、塚本遺族会会長の挨拶があり、終了となりました。

回天記念館の裏山の頂上には展望広場があり、モニュメント「未来の風」があります。風が吹けば、ステンレスの羽根がゆっくり回転します。また頂上からは、徳山湾が見渡せ、天気が良ければ四国が遠望できます。回天記念館から20分程度で登ることができます。

偶然ですが、塚本遺族会会長と徳山駅のホームでご一緒できました。お話を拝聴する中で、祖国と愛する者たちのために自らの命を懸けた若者の姿を、是非とも多くの方々にご覧いただきたいと感じながら、帰路につきました。

慰霊祭参列者一同

平成二十九年度フィリピン特攻慰霊の旅

評議員　太田兼照

平成29年11月28日から12月1日までの3泊4日の日程で、岩﨑副理事長と共にフィリピン慰霊の旅に行ったので報告する。

28日成田国際空港で岩﨑副理事長と合流しＡＮＡ便でフィリピンのマニラ空港に向かった。午後９時半に到着しフィリピン日本大使館付防衛駐在官・阿久津和誠1等空佐の出迎えを受けた。

そのまま迎えのワゴン車でホテルに向かう。午後10時過ぎにも関わらず一般道は渋滞していたが高速を利用し順調にホテルに到着。阿久津氏より日程の説明を受けその日は就寝。

2日目29日（水）マバラカットに向け出発。順調に車を走らせ昼には到着。途中の高速道路では常に清掃が行われきれいに保たれていることに感心した。また清掃員は全員女性だった。

現地の案内人の竹内ひとみさんと合流し昼食をとる。竹内さんは10月25日に行われている世界平和記念祭を20年前の第一回目の手配をきっかけにフィリピンでコーディネーターを始め、現地の方との親交も深い方である。

マバラカット市のガルボ市長のオフィスを表敬訪問した。会議室に30名以上の市民と談笑しているポロシャツ・ジーパン姿の人物が市長でありフレンドリーであることに驚かされた。応接室に通され、今回の日程・目的・特攻慰霊に関する活動状況を説明した。市長は今年9月就任したが世界平和祈念祭については、たいへん前向きであり、来年は3ヵ月前から準備をすると張り切っていた。また年明けには靖国神社を参拝する予定があるとのことで再会を約束した。名刺の裏に携帯電話番号を記し渡してくれたことが印象的であった。その後、アンヘレスのディソン邸に向かう。ご子息のジェット氏が出迎えてくれる。特攻隊戦没者慰霊顕彰会からのご厚志をお渡しし遺影に手を合わせた。「カミカゼ博物館」を見せて頂く。多くの展示品の中には寄贈されたもの、ディソンさんの描いた絵、ジェット氏が作った零戦等があった。日本兵に扮したジェット氏とご子息の写真もあり、ディソン氏の意志を継いで頂けていることに安堵した。また「神風」の名付け親である猪口力平氏の写真があり、生前のお姿を懐かしく思い出した。

カミカゼ博物館内の展示物

ジェット氏の案内でディソン氏の眠るお墓ホーリーメーリーに行った。奥様と並んだ芝生のきれいなお墓の前で読経し感謝の気持ちを伝えた。

夕食はジェット氏と会食を共にした。しばし歓談をして来年の再会を約束して別れた。

3日目30日（木）祝日の為アポイントはなく、マバラカット基地周辺にある慰霊碑参拝に出発。リリーヒルにある平和観音宮を参拝。「特攻平和観音経」を読誦し英霊に対し慰霊と感謝の気持ちを伝えた。次に向かったのはディソン氏の尽力により建てられたマバラカット西飛行場跡「第二次世界大戦に於いて日本神風特別攻撃隊が最初に飛立った飛行場」である。この地から初めての出撃が行われた

マバラカット西飛行場跡

平和観音宮

ことを考えると胸が熱くなった。記念碑横には防空壕があるが草が生い茂り中を確認することは出来なかった。

基地の外には形のきれいなアラヤット山があり、マバラカットから出撃した特攻隊員はこの山を右に見て旋回しレイテ湾を目指したという。途中陸軍の戦車部隊が敵を確認するために屋上にあがったホーリー・ロザリーバリッシュ・チャーチ、関大尉が出発前にオルガンを弾いた教会などを車内から眺めながら移動。途中、小学校の一角にある日比米慰霊塔に立ち寄る。31飛行場大隊の文字があるが詳細は不明。ホテルに向かった。

4日目12月1日（金）日本大使館表敬訪問。今回の訪問の趣旨などの説明並びに支援のお礼を申し上げる。大使は就任3ヵ月目であるが80年代に続き2回目の駐在。しかしながら慰霊碑などは未だ行っていないので近いうちに訪問すると話してくれた。岩﨑副理事長と飛行機、航空機の話で大いに盛り上がった。来年の慰霊法要には是非一緒に参加をしてほしい旨を岩﨑副理事長がお願いし大使館を後にした。

空港に着き、竹内さんのお手製の弁当。（おにぎり・玉子焼き・ハム）を頂いた。心のこもったお弁当は美味しく感謝。

すべての予定を終え帰国の途に着いた。

所見

今後、特攻隊戦没者慰霊顕彰会としては市主催の現地の公人、私人、日本からの参加者の多い10月25日の世界平和祈念祭に出席することに意義があると考える。できることであれば各所に特攻像を奉安し、より多くの方に当会の活動を知ってほしい。毎年慰霊参拝を行うことで、特攻精神の継承者を一人でも多く増やせればと希望する。

アラヤット山

世田谷山観音寺
特攻平和観音月例法要報告

（毎月18日14時より境内特攻観音堂に於いて、参加自由）

平成29年10月18日（火）月例法要
評議員　及川　昌彦

年次法要も終わり、すっかり秋めいてきました。観音堂での読経には先日入会されたジャーナリストの宮本雅史会員が初めて参加されました。

読経終了後は、境内の代官屋敷に移動して直会が開かれました。恵淳和尚より少年飛行兵だった呉正男会員に当時の航空兵の食糧事情についての質問がありました。かなり優遇されていて不自由していなかったとのお答えでした。パイロット出身の岩﨑副理事長からも、航空自衛隊でもパイロットはかなりの体力を消耗するので加給食といって一般の隊員より余分に支給される。訓練の無い日にも支給されるので体重超過に苦慮している隊員が続出しており問題になっているとのお話もありました。

大穂顧問からは、先日の年次法要はこれまでで最高の出来だったと絶賛されました。特に保坂世田谷区長が森丘哲四郎日記を読み込んで自身の言葉で感想を披露したことや堀田和夫父娘によるトランペット合奏に感動したとのことでした。

衣笠専務理事より、千玄室大宗匠による特攻隊員への献茶式を、世田谷山観音寺で行うべく現在、4月29日開催の実現に向けて調整中とのことです。この献茶式を今年度の顕彰会の一大行事として成功へ導きたいと思います。

平成29年11月18日（火）月例法要
評議員　長瀬　彰孝

法要開始前に会員の勉強会「遺書」があり、講師の小倉理事の研究成果が報告された。十名の参加者ではあったが、遺書という内容の重いことから全員真剣に聞き入った。

「天皇陛下のために死ぬという概念を何時ごろから日本人は持ち始めたのか」ということを歴史的に考察、また鎌倉時代から始まった武士の政治支配が武士道として確立され主君のために身を捧げる覚悟がその後の大和魂として受け継がれて、特攻隊員はもとより今も日本人の支柱として受け継がれているのではないかといったことを発表された。

若干の質疑応答の時間が設けられたが、宗教的な背景についても参加者から発言があった。日本の戦後教育を受けて育った我々と、キリスト教やイスラム教文化を持つ国とは宗教観がかなり異なっているのではないかといった意見も述べられた。

月例法要は勉強会のほか四名の参加で、その内の一名は山梨県からの初参加者だった。恵淳和尚が導師を務められた。山主太田賢照和尚は参列の一員として参加された。何時もの通り「魔訶般若波羅蜜多心経」ついで「特攻平和観音経」を参加者全員で読誦する等、滞りなく行われた。

導師による法話はなく、場所を移して本坊での直会に入った。初参加者の自己紹介があり、知覧に行って特攻隊員のことを知り、世田谷観音寺のホームページを見て今回の参加に至ったとの話があった。

会員からのトッピクスの報告に入り、大穂会員から三ヶ根山（愛知県西尾市）に行った際偶然見つけた「お町さん」の碑があり、関係者が管理されているため整備されていたとの話があった。衣笠専務理事から、全国に多くの慰霊碑があるが、公の機関で法要が行われている場所以外は、その後の管理が難しく、最近では統合されたり、後継者がそのまま放置される碑が増えている。このため埼玉県では隊友会、偕行社、水交会等が中心になり、それらのデータ化をしているとの話があった。

特攻像の建立もそうならないよう護国神社と調整をしながら進め、次年度は二か所程度建立ができそうだとの話があった。

会員投稿

講演会の実施報告

評議員　長瀬　彰孝

昨年十月靖国会館で行った奥本康大氏の講演会には八十名を超える参加者があり、会場は満席で盛況のうちに終えました。参加者のお一人からその感想が送付されましたので紹介いたします。

顕彰会講演会「父を語る　空の神兵と呼ばれた男たち」を拝聴して

イラストレーター・作家　斉田直世

平成二九年十月二七日、靖国会館九段の間で、奥本康大氏（パレンバン落下傘降下挺身作戦で最高殊勲をたてた奥本實中尉の御長男）の講演を拝聴しました。

ちょうどその一週間前、陸上自衛隊習志野駐屯地の一般公開日に足を運んだ私は、そこではじめて「パレンバン上陸作戦」のことを知りました。駐屯地内の展示施設「空挺館」内には、同作戦に関わる数多くの写真や資料（隊員が家族に宛てた手紙や奥本氏寄贈のパレンバンの石など）が展示されており、中でも、「血染めの髑髏旗」の実物は、七十年以上経て尚、鬼気迫るものがありました。ちょうどそこに奥本康大氏がいらっしゃって、講演会のお知らせをいただいたのです。

講演では、当時の写真や作戦地図とともに、戦闘の一部始終を聞くことができました。事前に拝読した奥本實中尉の手記（「なぜ大東亜戦争は起きたのか？空の神兵と呼ばれた男たち」高山正之・奥本實／共著より）にも作戦の様子が詳しく書かれていましたが、スクリーンに映し出された地図上には、中尉が被弾した場所、戦友達が命を落とした場所等が記されており、それは文章で読む以上に生々しく、戦地の情景が浮かんでくるようでした。学生時代、教科書で学んだ「第二次世界大戦」の項目、そのほんの数ページの間に、こういった一人一人の戦いがあったのだと、まざまざと思い知らされました。

数ヶ月という限られた訓練期間、パレンバン制圧に至るまでの厳しい道程……実際、そこには多くの奇跡が重なっていたのだそうです。中でも印象的だったのは、降下後の第一遭遇戦において、拳銃と手榴弾しか持たない僅か五名で、百五十名ものオランダ兵敵車両に戦いを挑み、撃退してしまうお話。当時二十代という若者たちの、その精神力と強い覚悟は想像を絶するものでした。

戦後生まれの私が常日頃思うのは、「戦争」と言えば、太平洋戦争ではなく、イラク・アフガン戦争や、北朝鮮による核ミサイル攻撃を想起する、現代の子供達に、日本戦史の実相をどう伝えたら良いのだろうか、ということです。講演の最後に、「父は生前、私には多くを語らなかったが、孫には時折戦争の話をしていたらしい」と奥本氏がおっしゃっていましたが、私も今になって、亡き祖父に当時の話を十分に聞けなかったことが悔やまれます。私の近親者に、戦争経験者はほとんど残っておりません。ですから、奥本中尉が克明な記録を残してくれたこと、それを息子さんが形にし、語り継いでくださることを、本当にありがたく思います。今回の講演をきっかけに、私自身も顕彰会の活動の中で学び、後世に伝えるお手伝いが出来ればと思います。この度は貴重なお話をありがとうございました。

※斎田直世氏の紹介

千葉県生まれ　日本女子大卒　一児の母

職業　イラストレーター　作家　各種メディアに恋愛アドバイザーとしても活躍

著書には、「ちょいモテ男になる技術」「０点ママの子育て迷走日記」「誉め言葉恋愛作戦」等

歌語り「万歳峠」を観劇して―人間爆弾「桜花」長澤政信さんの生きた証を辿る―

会員　山根　明子

歌語りシンガーソングライター・山本晴美氏の、歌語り「万歳峠（ばんざいとうげ）」を観劇しました。場所は埼玉浦和のエン圓倉寺で、参加人数は約80名。40～50代の男性が多く、女性は40代、20代の方も数名いました。

歌語りする山本晴美氏

山本晴美氏は、「命と平和」をテーマに、「愛」を見つめ、「戦争」をモチーフとした講演やコンサートを、学校、寺院、病院、国内外の組織など、全国各地で開催しています。活動は、多くのメディアでも紹介され、２０１２年に山梨放送のドキュメンタリー番組『いのち・平和』～この瞬間を生きる～として放送されました。

山本晴美氏へ感謝の花束贈呈

「万歳峠」とは、出兵する兵士たちが、舞台ともいえる石積の上に立ち、あいさつ（決意）を述べた場所です。その下では村人や家族が戦勝と無事を祈り万歳を唱え送り出したと言われています。このような意味のある場所は各地にあるそうですが、今回の歌語りでは、山梨県北杜市が舞台となります。山本晴美氏が出会った一通の遺書から、山梨県より出征し、人間爆弾「桜花」の特攻隊員となった１人の青年・長澤政信一飛曹の生きた証を訪ねます。

山本さんが辿りついたのは、鹿児島県鹿屋市でした。鹿屋市には鹿屋航空基地があり、戦時中、ここから日本で一番多くの特攻隊員たち（９０８名）が飛び立ちました。歌語り「万歳峠」では、ご遺族や日記からのエピソード、生き残った特攻隊員の話などをつなぎ合わせ、鹿屋航空基地史料館の協力のもとに検証を重ね、特攻隊員として命を閉じた１人の若者・長澤一飛曹の姿を追います。

長澤一飛曹は、16歳で予科練乙飛17期で１９４５年５月11日朝、第八神雷攻撃隊として鹿屋航空基地から人間爆弾「桜花」を乗せた「一式陸攻」で出撃、沖縄周辺で戦死したとみられます。

歌語り「万歳峠」は、写真家の松村誠氏を交え、歌と語りと映像で構成されています。美しいピアノの旋律とともに、長澤一飛曹の少年時代、出征、入隊、特攻隊員として出撃して亡くなるまでを歌い、語ります。タイムスリップライブと

称しているとおり、お歌の後に、汽車が汽笛とともに、観劇している私達を迎えにくるところから始まり、72年前に遡ります。当時の貴重なお写真、ラッパの音・軍隊の足音など効果音を多用し、情景が浮かび、まるで私たちもその場にいるかのような感覚を味わいます。

印象に残っているシーンはいくつもありますが、特に印象に残ったシーンをご紹介していきたいと思います。

(1) 横須賀海兵団での訓練の様子～ラッパの音とともに～

配属された横須賀海兵団で、長澤一飛曹は、徹底的に軍人精神を叩きこまれます。体を鍛えるための想像を超えた過酷な訓練の様子などが紹介されました。海兵団は、ラッパの音で一日のすべてが管理されます。一日の終わりに聞くラッパの音は、哀愁を誘うものでしたと、実際に使用していたラッパの音楽が流れました。

(2) 出撃前の宿舎でのひととき～ハーモニカ～

特攻隊員の方々の出撃前の宿舎となった野里国民学校。特攻隊員の方々がオルガンを弾いている写真が、とても印象に残りました。オルガンに夢中になる、あどけない少年たちの笑顔が広がっています。歌語りの中で、「人間らしいあたたかな感情を揺さぶる音色。任務の合間の少しの時間に、心ゆるむひとときを過ごしたのではないか」と、ハーモニカを吹いてくださいました。なんともいえない素朴で懐かしい音色が、体中に染み入ります。特攻隊員の方々に支給された慰問袋の中には、ハーモニカがたくさん入っていたそうです。特攻隊員の方々は、どんな思いで、オルガンやハーモニカの音色を聴いていたのでしょうか。きっと、懐かしいふるさとや故郷の大切な方々に、思いを馳せたのではないかと思います。

オルガンに夢中になる特攻隊員の方々

(3) 想いのこもったお守り～特攻人形～

歌語りの中でてきた、特攻人形。特攻人形とは、特攻隊員の方々が心細くないよう、寄り添う恋人や母親の身代わりとして、着物をほどいてつくられた人形です。特攻隊員の方々は、特攻人形をお守りのように大事に身に着けて、最期を迎えたそうです。まだ成人を迎えない若者が、人のあたたかさ・愛する人を知らぬ間に命を落とす。見送る方々は、どんなに胸が痛んだことでしょうか。「私はあなたにお供します。どんなに強いあなた

宿舎でのひとこま

でも、ひとりぼっちは悲しいわ。私も一緒に連れてって。」と、歌声が響くと、涙がこぼれました。お人形さんをせめてものかわりに。なんとも切ないエピソードです。

特攻隊員の方々は、お人形が怖い思いをしないよう、お人形のお顔を正面に向けず、お顔を自分の胸に向けるか背負うかしたそうです。本当に強い人は、小さなものにも命を感じ、優しいものだと、おっしゃいました。

出撃のシーンで「笑って征きます。お母さんの息子ですから。さようなら。」と歌声が流れると、会場が、すすり泣きで溢れました。

鹿屋航空基地史料館に展示された特攻人形。お人形の表情から、見送る方々の想いが滲み出るよう。

その後、海上自衛隊鹿屋航空基地史料館を訪れる「おとなの修学旅行」の活動などのご紹介をし、最期に、主催場所となった埼玉県出身で鹿屋から出撃した十数名の方々にふるさとの献歌を参加者全員で行い、歌語りは幕を閉じました。

おとなの修学旅行：長澤さん出撃の時間の鹿屋の空

私自身、何度も知覧を訪れたり、特攻関連の舞台を観たりするのですが、歌語り「万歳峠」の魅力は、1人の青年にスポットを当て、お歌や当時の写真、音響を多用し、感性に訴えかけるところでしょうか。まるでその場にいるかのような臨場感があり、軍隊に入ってから実際に出撃するまでの気持ちに思いを巡らせたり、見送るご家族の想いが、すっと、入ってきます。頭で考えるのではなく、音楽を通して、本を読むだけではわかりえないものを、追体験し、体の感覚として「体感」することができます。

戦没された隊員の方々がどのような状況で訓練を行い、どのような想いで飛び立っていったのか。見送る方々はどのような想いだったのか・・生き残りの方々が年々減少していく昨今、「真実」はどうであったのかを知ることは、もう極めて困難となっています。数少ない残された実物から、自分自身で学び、想像を巡らせていくしかないのだと思います。

山本晴美氏が「戦争の歴史は、その犠牲の大きさを数字で知るよりも、一つの命の重みを感じることが、これからの平和の礎になると思う」とおっしゃっていました。今回、歌語りを通じて、長澤一飛曹という1人の青年の生きた証を辿ることで、平面的だった歴史に、奥行きが生まれました。当時を生きた方々の想いに想像を巡らせ、深く感じることができ

ました。検証を重ねたこういった作品に触れたり、当時を知る方々に、実際はどうだったのか。お話を伺うことは、今を生きる我々にとって、歴史をより深く知り、先人方の想いを刻み、これからの未来を創っていくための貴重な糸口になるかと思います。

今年も、３月31日の靖国神社での特攻隊合同慰霊祭を皮切りに、日本各地で慰霊祭が行われます。場所によっては、参加者同士で食事をとり、交流を図る機会もございます。「真実」はどうであったのかを知る―。幸いなことに、私たちは、まだ間に合います。奮って、ご参加いただけましたらと思います。

６年前から続けている歌語り「万歳峠」。昨年５月の鹿屋航空基地史料館での開催で、延べ１００回目のコンサートとなりました。次回の開催は「？」だそうです。鹿屋航空基地史料館やご遺族の協力のもとに検証を重ねて作り上げた、年齢を問わないスタディーコンサートとなっております。鹿屋の歴史を知り平和のあり方を自身の言葉で考える時間を「体感」していただく貴重な機会です。当会員の多くの方のもとに長澤一飛曹の生きた証が届きますよう、心より、お祈りいたします。

大刀洗平和記念館を訪ねて

事務局長　石井光政

平成29年11月24日（金）に福岡県朝倉郡筑前町にある「筑前町立大刀洗平和記念館」を尋ねたので報告します。

平和記念館は旧陸軍大刀洗飛行場の一角で甘木鉄道大刀洗駅の目の前にあります。大刀洗飛行場は大正８年（１９１９）に完成し、その後多くの部隊、教育機関の地として、また民間の日本航空輸送（株）の中継基地として東洋一の大きさを誇りました。特に昭和15年（１９４０）に大刀洗陸軍飛行学校が開校されてからは、少年飛行兵２０００名、陸軍特別幹部候補生３０００名のほか整備関係技能者の養成等、多くの若者がここで教育訓練を受けました。

戦況の悪化とともに、大刀洗飛行場は昭和20年（１９４５）１月に飛行学校の教官助教による特攻隊が編成され新田原基地（宮崎）経由で出撃しています。また、５月には重爆撃機４機が特攻隊として直接沖縄方面に出撃しています。

多くの卒業生も特攻隊員として出撃しましたが、陸軍最大の航空基地であるがために、20年３月には米軍の沖縄侵攻作戦に合わせて太刀洗も大空襲を受け、多くの民間人も犠牲になりました。

大刀洗には平和記念館を中心に多くの戦跡が今も残されています。

大刀洗平和記念館はこれらに囲まれて立っていますが、特攻隊員の多くがここを巣立ち、あるいは経由して散華されたことと、戦争で大刀洗周辺の多くの民間人も犠牲になったことを忘れないようにと平成21年に筑前町が開館しました。

大刀洗平和記念館の特徴は、他の特攻関連記念館が、陸軍基地跡では陸軍の、海軍基地跡では海軍の関連遺品等のみの展示なのに比べ、陸海軍双方の展示をしているところです。今年は本館に加え、４月から特攻隊に関する常設館を新設したので見学させていただきました。たまたま、12月中旬まで本館２階の企画展示コーナーでは「少年飛行兵と予科練生」の特別展も開催され、小学生の団体も真剣に見入っていました。（予科練の展示品は茨城県阿見町の予科練平和記念館から借用）

ご案内くださった山本寛館長は、「この会館の目的は単に戦争の悲惨さを伝えるのではなく、ここに展示されているような多くの尊い犠牲の上に今の平和と繁栄があることを認識し深く感謝することです」と言っておられました。特攻隊

の常設館には空の特攻で亡くなった陸海軍の全戦死者の氏名と出身県、期別、年齢、出身学校等、突入場所、時期等の一覧表が壁に飾られており、見学者の中には親族の名前を発見し感慨にふけったり、引率教官には母校の先輩を見つけたり、今まで歴史の知識の中でしかなかったものが急に身近に感じられるようになる方も居られるとのこと。小中高から大学のサークル、近傍の自衛隊からも含め多くの見学者が来館されるとのことでした。若い世代にまず知って貰うことだ大切ですねと話しました。また、戦争体験者が少なくなる中、特に近年はその方たちがご高齢になり、お亡くなりになられたあと、貴重な資料が散逸してしまうのではないかとの危機感もあり、記念館では陸海共に資料収集と分析、データー化に努めているとのこと。この話は各所の慰霊祭参列時でも聞かれ、個別に収集した資料をデーターベース化したあとは、ネットワーク化ができれば歴史の分析に役立つのではと思った次第です。ただこれには多大の労力と資金と場所が必要であり、大刀洗のような自治体の取り組みに期待するところが大だと感じました。

　山本館長には長い時間最後までお付き合いいただき、いろいろと意見を交換させていただくとともに貴重お話も伺い、時間の経つのも忘れてしまう充実した研修でした。この場を借りて厚く御礼申し上げますとともに、読者の皆様にも訪問をお薦めするところです。

第５航空教育隊の門柱（移設）と大刀洗平和記念館（奥の建物）

海軍航空特攻戦没者名簿

陸軍航空特攻戦没者名簿

特攻戦没者の慰霊・顕彰を考える

会員　池田康博

ある日、事務局に会員のT氏から電話がありました。用件が終わった後、T氏は更に次のように話を続けたのです。

「自分は来年95歳になる。戦時にはフィリピンの比島方面軍司令部に勤務していた。22歳の時だった。

山下大将の司令部で経理部付副官をしていたのだが、19年10月、マバラカット飛行場から初めて特攻隊が飛び立った時、自分は涙でその特攻機を見送った。特攻隊員には妻帯者もいた。当時は戦果確認機も2機ついて行ったが、涙を流して帰ってきて、戦果を報告していたのを知っている。

今年も靖国神社に詣でたが、今でも、友がきが数多鎮まる靖国神社では、涙が溢れるのだ。」

見送りで流したという涙は、死地に向かう特攻隊員の気持ちを思っての涙であったろうか。或いは、国難に当たって敢然と飛び立つ特攻隊員への今生の別れの涙であったろうか。靖国神社で溢れる涙は、前途有為な若者が、命を散らした悔し涙であろうか。

“そうまでしなければならなかった戦い”も結局敗れ、しかし、その後、わが国は兎にも角にも七十数年の平和を保っています。

私は、六千四百有余名の特攻隊戦没者を思うとき、塩野七生さんの小説を思い出します。

その一つは、「人は常に、自らの信仰か自らの祖国か、それとも自らの家族か自らの主君のために、死を甘んじて受ける覚悟がなければならない。」

これは、小説『コンスタンティノープルの陥落』で、東ローマ帝国最後の皇帝、コンスタンティヌス十一世が、防衛軍の主要幹部を前に言ったという言葉です。彼は帝国最後の日、剣を抜き、わずかの騎士と共に、なだれを打って迫ってくるオスマン・トルコ兵の真っただ中に突入し、討ち死にするのです。

もう一つが、同じく『レパントの海戦』で、「国家の安定と永続は、軍事力によるものばかりではない。他国がわれわれをどう思っているかの評価と、他国に対する毅然とした態度によることが多いものである。」

これは、コンスタンティノープル駐在ヴェネチア大使が帰任後、元老院における報告で、自国政府を痛烈に批判した言葉です。

レパントで、トルコに勝利した西欧の神聖同盟側では、その後、ヴェネチアがトルコとの単独講和に走るのですが、トルコは、ヴェネチアの必要以上に卑屈な態度から、結局は妥協すると察知し、結果として、トルコをしてヴェネチア領であったキプロスの獲得という情熱に駆りたてることになったことを指しているのです。

さて、この二つの言葉を、特攻戦没者についていえば、特攻隊員も、志願にしろ、命令にしろ、甘んじて死を受け入れ、祖国や父母・弟妹のために、生きては帰らぬ出撃をしました。コンスタンティヌス十一世の言葉は、いつの世にも通じる言葉ではないでしょうか。

そして、二つ目は、「カミカゼ」と言えば今では国際共通語とも言えると思いますが、国を守るために「特攻」という戦法まで考え、そして、それに殉じた多くの若者がいた。“日本とはこのような国である”という、世界中の国の、日本に対する一つの評価になっているのではないかということです。

私たちが、特攻戦没者を慰霊顕彰し、語り伝えていくこと、そして、少しでも多くの国民にその事実を広めていくことは、結果として、わが国の平和と繁栄を維持していく一助になるのではないかと思うのです。

連載　山ある記１　埼玉県「丸山」

会員　池田康博

埼玉県横瀬町に、丸山という平凡な名の山がある。標高九百六十㍍、十月中旬、紅葉も期待して登ることにした。

登山は、西武秩父線の芦ヶ久保駅前にある道の駅「果樹公園あしがくぼ」駐車場に駐車してスタート、ここから山頂まで標高差約六百㍍、最初は、山の斜面に民家が点在している急傾斜の道を歩く。舗装されているがきつい傾斜で、高度を稼いでいる感じがする。

武甲山

このあたりから振り向けば、秩父の名山、武甲山が大きく迫って見える。山が半分削り取られている衝撃的な山容で、まるで、佐渡金山の「道遊の割戸」と同じく、人間の欲望を象徴しているようだ。

閑話休題。一番高い場所にある民家の付近から登山道に入る。丸山は、頂上周辺が埼玉県の「県民の森」となっているため、登山道と標識は整備されており迷うことはない。また、そのため道路も整備され、山頂直下まで車で行くこともできる。

駐車場を８時10分に出発して、途中、県民の森に立ち寄ったが、山頂到着は10時20分、登りの所要時間は２時間10分であった。

山頂には立派な展望台があって、ここからは、百名山の一つ、イザナギ、イザナミの神を祀っている両神山を目の当たりにできた。武甲山から目を移しながら見る両神山は一層神々しく見える。

帰りは、来た道とは反対側の大野峠、赤谷の集落へ下った。この道は、沢を渡ったり小さな滝もあったりで、変化を楽しませてくれた。実は、丸山は「奥武蔵の最高峰」だそうである。赤谷の集落近くで、その案内板を見た。

「道の駅」到着時刻は、13時６分、昼食、休憩も含めた周回コースの所要時間は約５時間であった。

両神山

文芸欄　歌俳柳の広場

短歌・俳句・川柳の部

井下駄

●根っからの方向音痴初雀

●先輩のモフモフの犬初笑

●かすむ目に目薬点せば
しみとシワ

原島　淳子

●さきがけと　征きし昭和の若櫻
散る花びらに　君をみる

●征く君の　瞳に一輪　桜咲く

●若桜　みごとに咲きし　海と空

●君が征く　光の中に　咲く桜

ネコ

突然の　一句頼むに　眠気飛ぶ

新たに「文芸欄」を設けました。
皆様のご投稿をお待ちしています。

編集人

平成29年度第３回理事会及び第１回臨時評議員会の実施報告等

事務局長　石井光政

一　平成29年度第３回理事会及び第１回臨時評議員会の実施報告

昨平成29年11月22日（水）に、当顕彰会事務室において第３回理事会が、12月12日（火）に、靖國会館田安の間において第１回臨時評議員会が、それぞれ開催され、別掲の平成30年度事業計画及び収支予算（正味財産増減予算書・案）が審議され、いずれも平成30年度計画として承認されました。

なお、平成30年度の当顕彰会の理事、監事等及び評議員は、次のとおりです。

理事等

会　長　杉山　蕃
理事長　藤田　幸生
副理事長　岩﨑　茂
専務理事　衣笠　陽雄
業務執行理事　水町　博勝
業務執行理事　小倉　利之
理　事　臼田　智子
理　事　鮒田　英一
理　事　大穂　園井
理　事　岡部　俊哉
理事兼事務局長　石井　光政
監　事　阿部　軍喜
監　事　羽渕　徹也
評議員
秋山　政隆　石井　千春
及川　昌彦　倉形　桃代
新垣　敬輝　根木　東洋
太田　兼照　早川　雅彦
深山　明敏　長瀬　彰孝
片山幸太郎　原島　淳子
原　知崇　岩成　真一
福江　広明　宮本　雅史

二　石橋一歌様に対する感謝状の贈呈

平成29年10月21日（土）特攻隊戦没者慰霊顕彰会の事務所において、慰霊祭で献吟をして頂いていた石橋一歌様に対する感謝状の贈呈を行いました。

石橋様は他の皇族方が参列される慰霊祭においても、今上天皇の御製を奉唱されるなどご活躍されてこられましたが、当顕彰会からの要望により昭和58年以降30年以上の長きにわたって春の靖国神社における特攻隊戦没者慰霊祭と、秋の世田谷山観音寺の年次法要に際して特攻隊員の辞世の句を奉唱して来ていただきました。この献吟によりどれだけ慰霊祭が厳粛に整えられたか、特攻隊の英霊のお気持ちがお鎮まりになったか測りしれません。

これに対する感謝の念を表すべく、藤田理事長から感謝状を送らせていただいたものです。現在はお弟子さんの吉野一心様が後を継いで奉唱していただいてます。石橋一歌様のこれからの御健勝とご活躍をお祈りするものです。

石橋一歌様を囲んで

三　第39回特攻隊全戦没者慰霊祭の開催について

第39回の慰霊祭は、平成30年３月31日（土）11時から執り行います。なるべく多くの方とご一緒に特攻隊の英霊に哀悼と感謝の誠を捧げたいと思います。会員以外の方でも参列できますので、お誘い合わせの上、御参集ください。

慰霊祭の細部については、同封の案内書をご覧ください。参列される方は、同

（公財）特攻隊戦没者慰霊顕彰会
平成３０年度正味財産増減予算書
平成３０年１月１日から平成３０年１２月３１日まで　（単位：円）

科　　目	３０年度予算	２９年度予算	２９年度見込	対前年予算増減	備　　考
Ⅰ 一般正味財産増減の部					
1 経常増減の部					
(1) 経常収益					
① 基本財産運用益	9,400,000	7,615,000	14,215,000	1,785,000	債権保有替
② 特定資産運用益	330,000	221,000	502,000	109,000	債権保有替
③ 年会費	3,600,000	4,400,000	3,608,000	△ 800,000	29' 参考
④ 慰霊事業益	2,320,000	1,910,000	2,317,000	410,000	29' 参考
⑤ 出版事業益	70,000	80,000	63,000	△ 10,000	29' 参考
⑥ 受取寄付金	4,100,000	3,800,000	4,168,000	300,000	29' 参考
⑦ 雑収入	0	0	0	0	
経常収益計	19,820,000	18,026,000	24,873,000	1,794,000	
(2) 経常費用					
事業負担金	820,000	970,000	813,000	△ 150,000	29' 参考
像制作委託費	3,600,000	1,320,000	0	2,280,000	
発送等委託費	1,810,000	2,440,000	1,634,000	△ 630,000	
他団体助成費	1,610,000	1,350,000	2,257,000	260,000	
役員報酬	340,000	400,000	340,000	△ 60,000	
給料手当	4,783,000	4,000,000	4,743,000	783,000	
福利厚生費	668,000	628,000	735,000	40,000	
旅費交通費	3,290,000	2,640,000	3,291,000	650,000	
通信運搬費	416,000	600,000	405,000	△ 184,000	
減価償却費	2	37,000	37,000	△ 36,998	
消耗品費	1,020,000	748,000	1,013,000	272,000	
印刷製本費	943,000	1,967,000	1,689,000	△ 1,024,000	
会議費	280,000	180,000	272,000	100,000	
光熱水料費	113,000	120,000	120,000	△ 7,000	
賃借料	3,300,000	2,190,000	2,270,000	1,110,000	
諸謝金	250,000	240,000	245,000	10,000	
雑支出	0	10,000	0	△ 10,000	
退職手当引当金繰入支出	0	204,000	0	△ 204,000	
経常費用計	23,243,002	20,044,000	19,864,000	3,199,002	
評価損益等調整前経常増減	△ 3,423,002	△ 2,018,000	5,009,000	△ 1,405,002	
基本財産評価損益等	0	0		0	
特定資産評価損益等	0	0		0	
当期経常増減額	△ 3,423,002	△ 2,018,000	5,009,000	△ 1,405,002	
2 経常外増減の部			0		
(1) 経常外収益	0	0	0	0	
貯蔵品資産受入	0	0	0	0	
資産計上	0	0	350		
投資活動収益計	0	0	350	0	
(2) 経常外費用	0	0	0	0	
特定資産への振替	0	0	0	0	
貯蔵品除却損	0	0	250	0	
経常外費用計	0	0	250	0	
当期経常外増減額	0	0	100	0	
当期一般正味財産増減額	△ 3,423,002	△ 2,018,000	5,009,100	△ 1,405,002	
一般正味財産期首残高	288,671,557	293,280,090	283,662,457	△ 4,608,533	
一般正味財産期末残高	285,248,555	291,262,090	288,671,557	△ 6,013,535	
Ⅱ 指定正味財産増減の部	0	0		0	
一般正味財産から振替	0	0		0	
当期指定正味財産増減額	0	0		0	
指定正味財産期首残高	0	0		0	
指定正味財産期末残高	0	0		0	
Ⅲ 正味財産期末残高	285,248,555	291,262,090	288,671,557	△ 6,013,535	

じく同封の「郵便払込取扱票」（会費納入用紙兼用）にご記入の上、お申込みください。

四　平成30度年会費納入について

当顕彰会の会計年度は、1月1日から12月31日までです。同封の「郵便払込取扱票」により平成30年度の年会費をお納め下さるようお願い致します。

なお、この「郵便払込取扱票」は、慰霊祭参加申込書も兼ねていますので、慰霊祭に参列される方は、この取扱票をご使用になり、同時にお払込み下さるようお願い致します。（既に本年度分の年会費を納められている方は、「入金済」と記入してあります。）

五　千玄室大宗匠献茶式（募集）

左記のとおり裏千家前家元、千玄室大宗匠様による特攻隊戦没者の御霊に対する献茶式を予定しておりますのでご案内します。

当日はご参列の皆さまへの呈茶もしていただく予定ですので準備の都合上、募集人員を先着40名とさせていただきます。

記

1　日時　平成30年4月29日（日）
　　11時～（10時45分までに着席）

2　場所　世田谷山観音寺
　　東京都世田谷区下馬4-9-4
　　TEL03-3410-8811

3　応募要領
　　特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局にメール、又はFAXでお知らせ下さい。
　　（電話では応募出来ません）
　　メール　tokuseniken@tokkotai.or.jp
　　FAX03-5213-4596

4　通報項目
　　氏名、年齢、住所、電話番号、又はメールアドレス

5その他：
（1）ご遺族の場合はご案内を別途差し上げる予定ですが、こちらでご応募されるときはご遺族である旨お書きください。
（2）募集期間を3月末日までとさせていただきます。
（3）参加費は無料です。

事務局からの報告等

寄付者御芳名（敬称略）
（平成29年10月1日～12月31日）
（単位千円）

一〇〇　呉　奈々子　　三〇　枡田　恭典
一〇　辻井　圭三　　一〇　吉田　三郎
一〇　氏家　康宇　　七　飯島　厚
七　橋本大二郎　　七　松澤　建
五　山口　久恵　　五　棟久　律子
三　杉山　蕃　　二　中本ゆかり
二　松尾　知男　　二　吉原　俊明
二　田鍋　守　　二　松本　浩一
二　岡嵜　幸平　　二　酒井　弘義
二　佐藤　幸葉　　二　萩原　正俊
二　谷　シゲ子　　二　枝元　昭典
二　山口　力　　二　佐藤　一志
二　布廣　鉄夫　　二　川崎　相
二　橋口　俊一　　二　阿部　保道
一　林　陽一　　一　平野　勝也
一　肥田木多恵子　　一　西村　洋文

新入会員名簿（敬称略）
（平成29年10月1日～12月31日）

北海道　青山　俊則
宮　城　武田　光彦
茨　城　青木　繁政
埼　玉　池田　英司　　平山晋太郎
千　葉　柏倉　直世
東　京　岡部　俊哉　　野本　恒雄
　　小森　正樹　　色摩　健夫
　　（株）武蔵富装
神奈川　横山　久幸
静　岡　城田　純一
奈　良　岩本　翠
愛　媛　越智　友美

会員訃報（敬称略）
謹んで哀悼の誠を捧げます

青　森　高橋　房之（28・6）
岩　手　照井　吾（29・8）
茨　城　中島　太郎（29・10・1）

埼玉　峯尾　栄（29・5・6）
埼玉　大地　達男
千葉　中江　仁（29・10・3）
東京　石積　誠一（27・8）
　　加藤　文城（29・5・6）
　　佐藤　幸葉（29・8・16）
　　渡部　利久
神奈川　岩松　重裕（29・2・27）
　　佐藤　淳一（29・5・6）
　　西川　順芳（29・6・5）
　　枝元　昭典
山梨　小林　哲也
兵庫　成田　正光
　　池淵ユキ子（28年）
奈良　藤田　栄一
香川　左光　幸男（29・8）
高知　村越　正清（29・1・11）
佐賀　田栗　薫（29・10・12）
熊本　谷川　義雄（29・8・8）

会報１１８号正誤表

次の通り誤りがありましたので訂正し謹んでお詫び申し上げます。

８ページ２段目

誤「降る雨や　明治は・・・・・」

正「降る雪や　明治は・・・・・」

会員ご入会のご案内

「特攻隊戦没者に感謝と敬意を」

当顕彰会は、先の大戦の末期、一つしかない命を、祖国の安泰と家族や大切な人のために捧げられた特攻隊員に対し「あなた達のことは忘れません。有難うございます。感謝します。私たちも努力します。どうぞ安らかに！」を胸に、慰霊・顕彰を行う団体です。これにご賛同して頂ける方ならどなたでも会員にお迎えいたします。多くの皆様のご入会をお待ちしております。

○当顕彰会の主な事業

・特攻隊戦没者の慰霊顕彰（他団体への参加を含む）

・会報の発行等による特攻及び戦没者の伝承等

・特攻に関する資料の収集、調査、図書等の貸出講演会等の開催その他

○年会費

・一般会員　３０００円

・学生会員　１０００円

○　URL:http://www.tokkotai.or.jp

ＱＲコード

ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しては、次の点にご留意くださるようお願い致します。

１　原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構です。可能ならば、テキスト、又はワードファイルで頂ければ幸いです。ＰＤＦファイルは編集の都合上お受けできません。

２　記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当顕彰会にお任せ願います。

３　投稿記事に関する写真がありましたら、なるべく添付して下さい。

４　原稿、写真等は、原則としてお返し致しませんが、必要な場合はその旨お書き添え下さい。

５　会報・機関紙、投稿記事等の送付先は、左記宛てとして下さい。

〒１０２-００７３
東京都千代田区九段北３-１-１
靖國神社遊就館内
公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会
電　話０３-５２１３-４５９４
ＦＡＸ０３-５２１３-４５９６
E-mail　tokuseniken@tokkotai.or.jp